

A Study of Phase in Mandarin Chinese

AOKI Moe

Abstract

This study explored phase in Mandarin Chinese. The main contents of this paper could be summarized as follows: First, based on the analysis of the Gong Qianyan (1995), we considered that sentence of Mandarin Chinese contained meaning of quantifier. Second, according to the Zhu Dexi (1982), we suggested which in *ba* (把) construction contained meaning of quantifier.

Key words phase situation type quantifier *ba* (把) construction

現代中国語における時相構造の「量化」現象

青 木 萌

要 旨

本稿は龚千炎（1995）が述べた時相（phase）は述語動詞が「量化」することによって成立していることを提示し、それを述語論理（predicate-logic）と命題論理（propositional-logic）を併用した論理式を運用して、文中のどの成分が時相を成立させているのかを明示した。そして、朱德熙（1982:185-186）が挙げた六つの“把”構文に対して考察を行い、“把”構文においても時相が存在し、述語動詞が「量化」されていることを証明した。

キーワード 時相 状況タイプ 数量化 “把”構文

0 はじめに

龚千炎（1995:13）は中国語の文を以下の四つの「状況タイプ」（情状類型）に区分した。

- ① 状態情状（state situation）
- ② 活動情状（activity situation）
- ③ 终结情状（accomplishment situation）
- ④ 实现情状（achievement situation）

本稿では“状態情状”を「状態タイプ」、「活動情状」を「無限持続タイプ」、「終結情状」を「有限持続タイプ」、そして“实现情状”を「瞬間タイプ」と呼ぶことにする。この状況タイプとは、時相構造の特徴によって区分されたものである。龚千炎（1995）は、陈平（1988）の見解に賛同し、時相を次のように定義している。

「時相は文の純粋な命題意味に内在する時間的特徴である。」（龚千炎 1995:4）

そして龚千炎は時相の成立について以下のように述べている。

「（時相は）主として述語動詞の語彙的意味によって決定される。また、述語動詞以外の成分が示す語彙的意味も時相を制限する役割を果たしている。」（龚千炎 1995:4）

以上の記述により、中国語における時相構造は、動詞に内在する〔持続〕や〔瞬間〕といった意味特徴、或いは、動詞とその他の成分によって構成されていると理解できる。

最も早く中国語の時相について言及した研究者は Chao（1968）である。Chao（1968 [2011]: 461-465）は“(第二声の ‘zhao’) 着”〔猜着了（推測しあてた）〕、“到”〔我碰到了一件怪事（私は奇妙なことに出くわした）〕、“见”〔听见（聞こえた）〕、“(方言における) 到”〔我碰到一个朋友（私は友人に出くわした）〕、“完”〔做完了事（事を成し終える）〕、“过”〔我吃过了饭就走（私は食事を終えたら行く）〕の六つが時相の役割を担えるとした。これらの補語はいずれも動詞の〔持続〕を〔終息〕させる役割を果たす。つまり、動詞の〔持続〕の「量」を制限していると解しえる。一方、龚千炎（1995）が述べる時相構造の種類は Chao（1968 [2011]: 461-465）の時相構造よりも豊富である。つまり、龚千炎（1995）は持続動詞に〔終息〕をもたらす結果補語以外に、方向補語、量詞、状況語、そして更には動詞自体に内在する意味特徴によっても時

相が成立しえると見なしている。そこで本稿では、時相構造には一つの共通点があることを主張したい。それは即ち、「量」の概念を有しているということである。この主張が妥当であることを証明するために、次章では龚千炎（1995）が挙げた実例に基づきながら時相構造の特徴、及び、生成過程を検討し、すべての時相構造は「量」の概念によって成立していることを提示する。そして、述語論理と命題論理を併用した論理式を用いて文中の各成分の間の意味関係を明示し、文中のどの成分が時相を成立させているのかを明らかにさせる。

1 時相構造の解釈

まず時相の「量化」を最も理解しやすい「有限持続タイプ」から論じる。用例は以下の三つである。なお本稿における中国語の日本語訳はすべて筆者が行った。

1.1 有限持続タイプ

「有限持続タイプ」は、動作行為が一定の間〔持続〕した後、必ず〔終息〕する特徴を有している。このタイプの実例としては以下のよう
な文がある。

- (1) 小红每天早晨读两首唐诗。(紅ちゃんは毎朝唐詩を二編読む。)
(龚千炎 1995:20)
- (2) 爸爸最近写了三篇论文。(お父さんは最近論文を三本書いた。)
(同上)
- (3) 冰已经化为水了。(氷はすでに溶けて水となってしまった。)
(龚千炎 1995:19)

まず (1) の文について考えてみよう。この文の時相は“读”に“两

篇”が加わることによって構成されている。ここでの動詞“读”は「読む」の意を示し、概念上無限に〔持続〕を保つ動詞である。つまり“读”自体では自然にその〔持続〕を〔終息〕することができないのである。従って、“读”に“唐诗”が伴った“读唐诗”という動目構造も同様に〔持続〕を保持し〔終息〕しえないと考える。しかし、“读唐诗”に“两篇”という数量詞が加わると、“读”の〔持続〕の「量」が“两篇”の分量に限定される。よって、“读唐诗”という出来事は〔持続〕の過程を経るものの、“两篇”が生起していることにより、論理上必ず〔終息〕することになる。従って“小红每天早晨读两首唐诗”は“读”と“两篇”によってひと纏まりの出来事(event)、つまり時相が充足され、この文は「有限持続タイプ」という状況タイプに当てはまると理解できる。

次は(2)の“爸爸最近写了三篇论文”という文について考察する。ここでは“写”と“三篇”によって時相が成立し、「有限持続タイプ」であると考えられる。論理的な観点からいうと、“写”は「書く」という意を表し、永遠に〔持続〕する動詞である。故に、“写”の目的語である“论文”が伴った“写论文”という動目構造においても“写”は〔持続〕の概念を固持し、〔終息〕不可の出来事を構成していると思える。ところが、“写论文”に“三篇”という数量詞が加わると、“写”の〔持続〕が必ず〔終息〕することになる。つまり、“写论文”が“三篇”に到った時点を一ひと纏まりの出来事として捉え、“写”の〔持続〕が「量化」されるのである。

(3)の“冰已经化为水了”という文は“化为水”によって時相が構築されていると見なす。つまりこの文は「有限持続タイプ」である。論理的な角度からみると、“化”は「溶ける」という意味を表し、概念上、際限なく〔持続〕を維持する動詞である。しかし“化”の後方には“为

水”が生起しているので、“氷”が“水”に変化した時点でひと纏まりの出来事が完成する。つまり、“氷已经化为水了”における“化”は“水”となるまでの間に限って[持続]しているのである。そしてこの“化”の[持続]は「量」と見なしえるので、時相が充足したことになる。

そこで「有限持続タイプ」の文を松村（2005）に倣い、述語論理と命題論理を用いた論理式によって解析することにした。これにより、文中の各成分の間の意味関係を明確にさせ、かつどの成分が時相の役割を果たしているのかを明示させることができる。このような解析法は龔千炎（1995）の論考には見られないが故、試みる価値があると思われる。本節では（1）の“小红每天早晨读两首唐诗”の文を代表例とし、この文の中から時相の成立と密接に関連する成分に注目して論理表記する。それは（1a）のようになる。

(1a) 读’ (小红, 唐诗) & 有’ {读’ (小红, 唐诗), 两首}

読ム ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

この式全体は「紅ちゃんが唐詩を読み、かつそれ（紅ちゃんが唐詩を読む）が二編という量を持つ」という意味を表している。この式は“读’ (小红, 唐诗)”と“有’ {读’ (小红, 唐诗), 两首}”の二つの命題によって構成されている¹⁾。“&”は連言 (conjunction) を意味し、“读’ (小红, 唐诗)”と“有’ {读’ (小红, 唐诗), 两首}”が同時に成立していることを表現している。そして“读’ (小红, 唐诗)”は「紅ちゃんが唐詩を読む」という意味を表し、“有’ {读’ (小红, 唐诗), 两首}”は「紅ちゃんが唐詩を読むが二編という量を持つ」という意を表している。従って、この式は“小红读唐诗”に“两首”という成分が加わったことにより、時相が成立したということを表現していると理解できる²⁾。

1.2 瞬間タイプ

本節では「瞬間タイプ」について検討する。このタイプの特徴は「瞬間的」な出来事を表現することである。従って、動詞の開始地点と終息地点がほぼ重なり合うため、「持続」の過程を表わさない出来事を構成することとなる。では実例を用いて考察を行うことにしよう。

(4) 小孩儿醒了。(子供が目を覚ました。)(龚千炎 1995:25)

(5) 那只杯子打破了。(あのコップは割れてしまった。)(龚千炎 1995:26)

(6) 他突然坐了下去。(彼は突如腰を下ろした。)(同上)

まず(4)の“小孩儿醒了”の文から考察する。この文における“醒”「目覚める」は「瞬間的」な意味特徴を有している。では如何にして「量」の概念が生じるのだろうか。それは龚千炎(1995:26)の記述の如く、“小孩儿醒了”は“睡”という状態から“醒”という状態に到った、と見なす。故に、“醒”という状態が生じた時点で、概念上、その“醒”は二度と行われることがないため、“小孩儿醒”の動作行為の「量」は「ゼロ」となる。従って“小孩儿醒了”は“醒”に内在する「瞬間」の意味特徴によって時相が成立していると理解できる。

(5)の“那只杯子打破了”における時相は、持続動詞の“打”と結果補語の“破”によって構成されている。この“打破”「割れた」という連語は「瞬間的」な出来事である。つまり、龚千炎(1995:26)が述べるように、コップが正常な状態から割れたという状態に到ったのである。従って「コップが割れた」という出来事が生じた時点で“打”の動作行為の「量」は「ゼロ」となり、時相が形成されたと考えられる。

今度は(6)の“他突然坐了下去”という文について検討しよう。ポイントとなるのは“下去”と“突然”である。まずこの文の“坐”「座る」という持続動詞は“下去”という方向を得ると、“坐”の「持続」が

必ず「終息」する。つまり“他坐下去”の状況タイプは「有限持続タイプ」である。しかし、この文には更に「瞬間性」を表現する“突然”が状況語として生起しているので、“他坐下去”という動作行為が「瞬間的」なものとなる。そのため、“他坐下去”が瞬時に行われることで“坐”という動作行為の「量」が「ゼロ」となり、ひと纏まりの出来事、換言すると時相の概念が成立したと見なしうる。

そこで、上記の例を述語論理と命題論理を用いた論理式によって解析することにしたい。まず(4)の“小孩儿醒了”の文で時相と直接関係する成分に着眼して論理表記すると、

(4a) 醒' (小孩)

目覚メル ~ガ

となる。この式は「子供が目覚める」という意味を表している。この論理式は、“小孩醒”の文における時相は“醒”に内在する「瞬間」の意味特徴によって成立していることを表現している。(6)の“他突然坐了下去”の文に対しても論理表記を行ってみよう。

(6a) 坐' (他) & 有' {坐' (他), 下去} & 有' [有' {坐' (他), 下去}, 突然]

腰ヲ下ロス ~ガ 持ツ ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ

この論理式は「彼が腰を下ろし、かつそれ（彼が腰を下ろす）が下がっていくという結果を持ち、かつそれ（彼が腰を下ろしていく）が突如という様態を持つ」という意味を表している。“坐' (他)”が「彼が腰を下ろす」という意味を表し、“有' {坐' (他), 下去}”が「彼が腰を下ろすが、下がっていくという結果を持つ」という意味を表し、“有' [有' {坐' (他), 下去}, 突然]”が「彼が腰を下ろしていくが、突如という様態を持つ」という意を表している。上記の式から“他突然坐了下去”の時相は“他坐下去”に“突然”が加わったことによって成立していることが看取しえる。

1.3 無限持続タイプ

このタイプは、動詞に内在する〔持続〕の意味特徴のみによって時相が成立する。つまり、〔終息〕という概念を必要としないのである。そのため、たとえ出来事が〔持続〕を続けて〔終息〕することがなくても、ひと纏まりの文として扱われ、時相の概念が成立する。そこで龚千炎(1995:17-18)の中から「無限持続タイプ」の用例を三つ引用しよう。

- (7) 他正在批改作业。(彼はちょうど宿題を添削しているところだ。)
- (8) 爸爸一直在写论文。(お父さんはずっと論文を書いている。)
- (9) 我不断地思考着各种问题。(私は絶えず様々な問題について考え続けている。)

まず(7)の文から検討する。この文における動詞“批改”は「添削をする」という意を示し、〔持続〕の意味特徴を有している。そしてこの文の中には“批改”の〔持続〕を〔終息〕させる成分が他に存在しないので、“批改”が際限なく〔持続〕し、この〔持続〕が「量」の概念を成立させていると理解する。その証拠として、“他正在批改作业”には“批改”の〔持続〕を保証する“正”と“在”が生起している³⁾。

次に(8)の“爸爸一直在写论文”における時相について考えてみよう。この文では持続動詞の“写”「書く」が生起している。そして“爸爸一直在写论文”にはこの“写”を〔終息〕させる成分を見つけないので、“写”に内在する〔持続〕の意味特徴が無限の「量」を保持して時相が形成されたと考える。その証拠に、“爸爸一直在写论文”には“写”の〔持続〕が際限なく保持されていることを示す“一直”と“在”が生起している。

そして(9)の例の“我不断地思考着各种问题”は、“思考”「考える」

に内在する〔持続〕の意味特徴が無限の「量」を有していると考ええる。そのため、“我不断地思考着各种问题”には“不断地”が生起しており、これが“思考”の際限なき〔持続〕を支持していると解しうる。更に、“思考”の後方には時態助詞の“着”が生起しており、これによって“思考”の〔持続性〕をよりはっきりと理解することができる。

本節の最後に(7)の“他正在批改作业”における時相の成立を論理式によって示しておこう。

(7a) 批改’ (他, 作业)

添削スル ~ガ ~ヲ

この式は「彼が宿題を添削する」という意味を表す。つまり“他正在批改作业”の時相は“批改”に含まれる〔持続〕の意味特徴によって形成すると考える。

1.4 状態タイプ

このタイプの特徴は、静態的な状態を表すことである。従って、動態的な〔持続〕や〔開始〕、〔終息〕といった概念を必要としない状況タイプであるといえる。

そこで本稿ではこの「状態タイプ」の時相は、動詞に内在される「静態的な持続」といった意味特徴によって時相の概念が成立すると考えた。用例は下記の三つである。

(10) 他姓王, 叫王小刚。(彼の姓は王で、王小鋼といいます。)(龚千炎 1995:14)

(11) 我认识这个人。(私はこの人を知っている。)(同上)

(12) 他就那么一动不动地在床上躺着。(彼はあのようにして微動だにせずベッドの上に横たわり続けている。)(同上)

まず(10)の“他姓王, 叫王小刚”の文について論じる。この文には

“姓”、“叫”という二つの動詞が生起している。“姓”は「～という姓である」の意味を表し、“叫”は「～という名である」という意を表している。論理的な観点からいうと、この文における“姓”、“叫”は[開始]や[終息]といった概念のない動詞である。では如何にして「量化」の概念が成立しているのだろうか。それは“姓”と“叫”は[静的な持続]といった意味特徴を有し、概念上“他”が“王”という姓を、また“他”が“小刚”という名前を保持し続けている状態にあると考えられるので、これまでの時相タイプと同様に、動詞に「量」の概念が与えられ、ひと纏まりの出来事を構成していると判断することができる。

今度は(11)における“我认识这个人”について考えてみよう。注目すべきは“认识”という動詞である。この動詞は「知っている」という意を示すが、これは(10)の“他姓王, 叫王小刚”と同様に、動態的ではなく静態的な動詞である。つまり、“认识”は“这个人”という「特定」の人物を認識し続けることによって、ひと纏まりの出来事を形成している、と考えられる。故に、“我认识这个人”は“认识”に内在する[静態的な持続]によって「量化」が成立し時相が構築されていると解釈することができる。

そして、(12)の“他就那么一动不动地在床上躺着”は“躺”という動作行為によって生じた姿勢が[静態的に持続]することで時相が成立すると見なす。というのは、“他”が“躺”した後の結果の[持続]を「量化」として見しえるからである。そのため、この文には“一动不动地”と[結果の持続]の意を示す時態助詞“着”が生起し、“他在床上躺”という出来事の[静態的な持続]のあり様を適格に表現している。

では(10)の“他姓王”を論理表記してみよう。

姓デアル～ハ ～トイウ

(10a) 姓’ (他, 王)

この論理式が示す意味は「彼は王という姓である」である。要するに“他姓王”は“姓”に内在する「静的な持続」が時相の概念を成立させていると考える。

2 前置詞“把”構文における時相構造

前章により中国語の文は、述語動詞を「量化」することによってひと纏まりの出来事、即ち時相を構成していることが判然とした。そこで本章では前置詞“把”によって構成される文においても時相の概念が生じていることを提示したい。つまり、“把”構文における述語動詞は、必ず「量化」されているということである。これを証明するために、まず朱德熙(1982:134-135)の例を紹介したい。

- (a) 飞得高(飛んで高く位置する)
- (a)' 飞得很高/飞得高高的(飛んでとても高く位置する)
- (b) 走得远(歩いて遠く隔たる)
- (b)' 走得老远/走得远远的(歩いてとても遠くに隔たる)
- (c) 洗得干净(洗って清潔になる)
- (c)' 洗得挺干净/洗得干干净净的(洗ってとても清潔になる)
- (d) 擦得亮(拭いて綺麗になる)
- (d)' 擦得很亮/擦得锃亮/擦得亮晶晶的(拭いてとても綺麗になる)

朱德熙(1987:134)は(a)、(b)、(c)、(d)における動補構造は「量」の概念を含まないが(a)'、(b)', (c)', (d)'における文は「量」の概念を含むと述べた。

注目に値することは、(a) — (d)のように「量」の概念を有さない動補構造は前置詞“把”構文において生起しえないが、(a)' — (d)'の

ような「量」の概念を有する動補構造は“把”構文において生起しえる、ということである。そこで朱徳熙（1982:135）は次のような例を挙げた。

(e) 把眼睛睁得大大的（目を大きく見開く）

(e)' *把眼睛睁得大

(f) 把桌子擦得锃亮（机をきれいに磨く）

(f)' *把桌子擦得亮

従って、“把”構文においても時相が形成されると推論することができる。そこで以下この (e)、(f) の文について詳述する。

まず (e) “把眼睛睁得大大的” の“睁”は意味上 [持続] の意味特徴を有している。しかし、“睁”の後には“大大的”が様態補語として現れているので、“睁”という持続動詞に“大大”という結果が生じた時点で、この文における“睁”の [持続] の「量」が定まり [終息] することとなる。故に、時相が充足し、“把眼睛睁得大大的” の状況タイプは「有限持続タイプ」であると見なしえる。

そして、(f) の“把桌子擦得锃亮”における“擦”は [持続] の意味特徴を備えているが、この“擦”という動作行為の結果として“锃亮”という様態補語が後続すると、概念上“擦”の [持続] が“锃亮”によって「量化」され [終息] することとなり、ひと纏まりの出来事が形成される。つまり、この文は「有限持続タイプ」の状況タイプであると考えられる。

以上により、“把”構文においても、時相の概念が存在していることが分かった。そこで更に朱徳熙（1982:185-186）における記述および用例を引用し、様々な“把”構文は一律に時相の概念を有していることを証明したい。

朱徳熙（1982:185）は“把”について以下のように述べている。

「把」によって構成された述連構造において、動詞は単純な単音節、

又は二音節であってはならず、最低でも動詞の重畳型でなければならぬ。また、より多く見られるのは“把”の前後に他の成分が生起する場合である。」

この朱徳熙 (1982:185) が述べた「動詞の重畳型」、「“把”の前後に他の成分が生起する」とは、まさに述語動詞を「量化」させる成分であり、これらの成分によって時相が確定していると考えられる。以下実例を挙げて考察を行うことにしよう。まず朱徳熙 (1982:185) が挙げた六つのタイプの“把”構文を紹介する。その例は、

- ① 動詞が重畳型である例
- ② 動詞の前に副詞の“一”が生起する例
- ③ 動詞の前に“往”、“当”といった前置詞構造が生起する例
- ④ 動詞の後に補語が生起する例
- ⑤ 動詞の後に目的語が生起する例
- ⑥ 動詞の後に時態助詞の“着” 或いは“了”が生起する例

である。では「動詞が重畳型である例」から順に検討していくことにしよう。

2.1 動詞が重畳型である例

- (1) 把桌子抹抹 (机をちょっと拭く)
- (2) 把衣服洗洗 (衣服をちょっと洗う)
- (3) 把数目核对核对 (数をちょっと確かめる)

この三例における動詞“抹”、“洗”、“核对”はいずれも持続動詞である。従って、論理的な観点からいうと、これらの動詞は際限なく〔持続〕する概念にある。しかし自明の如く“抹”、“洗”、“核对”の後方にはそれぞれ“抹”、“洗”、“核对”が後続している。つまり、これらの成分は動詞ではなく「少量」の意を示す動量詞であるため、動詞の〔持続

性]を限定し時相構造が構築することになる。故に、以上の三例の状況タイプはともに「有限持続タイプ」であるといえる。

つまり、(1)の“把桌子抹抹”の文では、“抹”という動作行為の「量」が動量詞の“抹”によって制限され、「少量」という際限のある「量」を得る。そして、(2)の“把衣服洗洗”では、“洗”が[持続]して行われるが、その[持続性]が動量詞の“洗”によって制限される。故に、“洗”の動作行為の「量」が「少量」となる。最後の(3)における“把数目核对核对”の文は、“核对”が[持続]するが、動量詞“核对”の後続により、その[持続]が「少量」という限りのある「量」を持つことになる。

そこで、(1)の文を論理表記してみよう。

拭ク ~ガ ~ヲ持ツ ~ガ ~ヲ

(1a) 把' [φ, 桌子, 抹' (φ, 桌子) & 有' {抹' (φ, 桌子), 一抹}]

モタラス ~ガ ~ニ ~トイウコトヲ

この論理式全体は「誰かが、机に、誰かが机を拭き、かつそれ(誰かが机を拭く)がちょっとという量を持つということをもたらす」という意味を表している⁴⁾。“抹'(φ, 桌子)”が「誰かが机を拭く」という意味を、“有' {抹'(φ, 桌子), 一抹}”が「誰かが机を拭くがちょっとという量をもつ」という意を表している。従って、“抹桌子”に“一抹”が加わった“有' {抹'(φ, 桌子), 一抹}”の式が時相の成立を示していると理解できる。

2.2 動詞の前に副詞の“一”が生起する例

(4) 把头一抬(頭をひょいとあげる)

(5) 把眼睛一瞪(目をぎょろっと見開く)

“把头一抬”、“把眼睛一瞪”の二例における“抬”、“瞪”という動詞は

本来「持続」の意味特徴を有する動詞である。しかし、両者の文にはいずれも動作の「瞬時性」を示す副詞“一”が生起しているので、“抬”と“瞪”は「瞬時的」な動作行為となる。故に、“抬”、“瞪”の「動作量」は“一”が加わった時点で「ゼロ」となる。従って、(4)の“把头一抬”は“一”によって“抬”の「動作量」が即時に「終息」して時相が成立していると見なす。そのため、(4)の状況タイプは「瞬間タイプ」であると判断できる。

一方、(5)の“把眼睛一瞪”においても“一”によって“瞪”の「動作量」が瞬時に「終息」して「ゼロ」となるので、時相が成立していると解しえる。従って、(5)の文も「瞬間タイプ」に属していると考えられる。

そこで(4)の文を使って時相の成立を論理的に形式化してみよう。

アゲル ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

(4a) 把' [φ, 头, 抬' (φ, 头) & 有' {抬' (φ, 头), 一}]

モタラス ～ガ ～ニ ～トイウコトヲ

上記の論理式は「誰かが、頭に、誰かが頭をあげ、かつそれ（誰かが頭をあげる）が短時間という様態を持つということをもたらす」という意味を表している。“抬' (φ, 头)”が「誰かが頭をあげる」という意味を、“有' {抬' (φ, 头), 一}”が「誰かが頭をあげるが短時間という様態を持つ」という意を表している。故に、“抬头”に“一”が加わったことを示す“有' {抬' (φ, 头), 一}”の式が書かれた時点で時相が成立していると解しうる。

2.3 動詞の前に“往”、“当”といった前置詞構造が生起する例

(6) 把袖子往上卷 (袖を上へ捲る)

(7) 把粮食往南边运 (食糧を南方へ運ぶ)

(8) 把酒当水喝 (酒を水として飲む)

(9) 不把你当外人看 (あなたを部外者であると見なさない)

上記の四例は前置詞の役割を担う“往”、“当”という成分が生起していることにより動詞“卷”、“运”、“喝”、“看”に内在する[持続]の「量」が限定され、時相が構築されると判断できる。つまり、(6)の“把袖子往上卷”における動詞“卷”は[持続]の意味特徴を有しているので、論理上、際限なく[持続]する性質を有している。しかし、前置詞“往”によって“卷”という行為の方向が“上”へと定まると、“卷”の「動作量」が限定され、理論上、必ず[終息]する行為となる。というのは、“袖子”(袖)の長さには限界があるからである。よって、この文の状況タイプは「有限持続タイプ」に当てはまることが分かる。

同様に、(7)の“把粮食往南边运”は、持続動詞“运”と“往南边”という到達地を表す前置詞句が共起することで“运”の「運動量」が確定し「量」の概念が生じる。よって、時相の成立を理解しえる。即ち、この文の状況タイプは「有限持続タイプ」と考える。

さて(8)、(9)の例は「状態タイプ」に区分されると見なすのが妥当である。まず(8)の“把酒当水喝”を見ると、この文は“当水”の生起によって“酒”の「飲み方」を限定して「水として」述べることにより[多量]の意を表わしている。よって、「量化」の概念が働き、時相が成立していると思しえる。

また、(9)の“不把你当外人看”では、考察の便宜上、否定の意を示す否定副詞“不”を取り除いて考えると、“你”の「見なし方」を限定して「部外者として」述べることにより[範囲確定]を行っている。故に「量化」が働いて時相が充たされたと見なしうる。

では(6)の文を用いて時相の成立を形式化させてみたい。

メクル ～ガ ～ヲ 向カウ ～ガ ～ヘ

(6a) 把' [φ, 袖子, 往' {袖子, 上, 卷' (φ, 袖子) & 往' {卷' (φ, 袖子), 上}]

アル ～ガ ～ヘ ～トイウ状態ニ

モタラス ～ガ ～ニ ～トイウコトヲ

この論理式は「誰かが、袖に、袖が上の方向へ誰かが袖をめくり、かつそれ（誰かが袖をめくる）が上の方向へ向かうという状態にあるということをもたらす」という意味を表している。“卷’（φ，袖子）”が「誰かが袖をめくる」という意味を、“往’ {卷’（φ，袖子），上}”が「誰かが袖をめくるが上の方向へ向かう」という意味を、そして“往’ {袖子，上，卷’（φ，袖子）& 往’ {卷’（φ，袖子），上}”が「袖が、上の方向へ、誰かが袖をめくりかつそれ（誰かが袖をめくる）が上の方向へ向かうという状態にある」という意を示している。つまり“卷袖子”に“往上”が加わったことを意味する“往’ {袖子，上，卷’（φ，袖子）& 往’ {卷’（φ，袖子），上}”の式が時相の成立を示している。

2.4 動詞の後に補語が生起する例

- (10) 把绳子绞断（繩を断ち切る）
- (11) 把瓶子灌满（容器に注ぎ満たす）
- (12) 把孩子抱回去（子供を抱いて帰る）
- (13) 把脸晒得黧黑（顔を焼いて真っ黒にする）
- (14) 把他气得连话都说不出来了（彼を怒らせて言葉さえ出せないようにさせた）

(10) から (14) までの各例は補語が動作行為を制限することで「量化」の概念が生じ、時相が成立していると見なす。まず、結果補語が生起している (10) の“把绳子绞断”と、(11) の“把瓶子灌满”について考える。これらの文の状況タイプは揃って「有限持続タイプ」である。

う意味を表している。“绞’ (φ, 绳子)”が「あなたが繩を断つ」という意味を、“有’ {绞’ (φ, 绳子), 断}”が「誰かが繩を断つが切れるという結果を持つ」という意を表している。従って“把绳子绞断”の時相は、“绞绳子”に“断”が加わって成立したと解しえる。即ち (10a) における“有’ {绞’ (你, 绳子), 断}”の式がそれを表している。

2.5 動詞の後に目的語が生起する例

(15) 把大门上了锁 (門に鍵をかけた)

(16) 把他免了职 (彼を免職した)

(17) 把手套丢了一只 (手袋を片方無くしてしまった)

この三例の状況タイプは揃って「瞬間タイプ」に該当する。留意すべき点は、動詞の後に生起する目的語によって動作が瞬時に「終息」することである。つまり“上”、“免”、“丢”の後にはこれらの目的語として“锁”、“职”、“一只”が存在するため、動作行為の「量」が確定するのである。即ち、(15)の“把大门上了锁”では“上”という持続動詞の後に“锁”が生起しているので、“大门”の一部分である“锁”に対して“上”「かける」という行為を行うと、その時点で“上”という行為は即時に「終息」する。つまり“上”の動作行為の「量」が「ゼロ」となる。故に、時相が成立する。

(16)の“把他免了职”においては、朱德熙(1982:186)が述べるように、この“职”とは“他”に属している。よって、この確定的な“他”の“职”を免じた時点で、“免”の行為はすぐに「終息」し、再度“免”が行われることはない。故に、“免”の動作行為の「量」は「ゼロ」となり、時相が充足されたと解しえる。

そして、(17)の“把手套丢了一只”では、瞬間動詞である“丢”によって特定の“一只”を失うと、この“一只”を無くした時点で“丢”の

考える。そのため、“把头抬着”の末尾には“抬”の結果が〔持続〕していることを示す時態助詞“着”が生起している。従って、この文の状況タイプは「状態タイプ」と見なしうる。

(19)の“把门开着”も同様の理である。つまり、意味上、何者かが“开”を行い、その結果が際限なく〔静態的に持続〕しているのである。よって、この文の状況タイプも「状態タイプ」に当てはまると解しうる。それが故、時態助詞の“着”が文末に付記され、〔動作の結果の持続〕を表現していることが分かる。

では、(20)と(21)における“把衣服脱了”と“把房子卖了”はどのように解すべきであろうか。これらの文において生起する動詞“脱”、“卖”は共に持続動詞である。しかし、“把”によって出来事の〔受け手〕である“衣服”、“房子”が導かれているので、“把衣服脱了”は特定の“衣服”を“脱”した時点で動作行為の量は「ゼロ」となり、“脱”が再び行われることがない。同様に“把房子卖了”は特定の“房子”に対して“卖”という行為をするに到ると、その後はこの“房子”を再び“卖”することは不可能なので、“卖”に備わる〔持続〕の「量」が「ゼロ」となり、時相が成立したと見なしえる。よって、(20)、(21)の状況タイプはともに「瞬間タイプ」とであると理解できる。

では(18)の“把头抬着”の文を論理表記しておこう。

擡ゲル ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

(18a) 把' [φ, 头, 抬' (φ, 头) & 有' 抬' (φ, 头), 着']

モタラス ～ガ ～ニ ～トイウコトヲ

上の式は「誰かが、頭に、誰かが頭を擡げ、かつそれ（誰かが頭を擡げる）が〔結果の持続〕という様態にあるということをもたらす」という意味を表している。“抬' (φ, 头)”が「誰かが頭を擡げる」という意味を、“有' 抬' (φ, 头), 着'」が「誰かが頭を擡げるが〔結果の持

続] という状態にある」という意を表している。よって (18a) の式は“拾’ (ϕ , 頭)”の式が成立した時点で時相が成立すると解しえる。

以上の考察によって、“把”構文においても「量」の概念、つまり時相を構成していることが明晰となった。

3 結びにかえて

本稿は龚千炎 (1995) が論じた時相は、補語、量詞、状況語、或いは動詞に内在する意味特徴によって述語動詞を「量化」することで成立している、ということを提示し、その後、述語論理と命題論理を併用した論理式を用いて文中の各成分の間の意味関係を明示させ、どの成分が時相を成立させているのかを判然とさせた。

そして、朱德熙 (1982:185-186) が挙げた六つの“把”構文に対して考察を行い、“把”構文にも時相が存在し、述語動詞が「量化」されていることを証明した。

注

- 1) “有’ {读’ (小红, 唐诗), 两首}”において“有”が用いられているが、これは『論理哲学論考』(ウイトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳:184)における記述を拠り所としている。野矢は論理形式について次のような注釈を与えている。

「ある対象の論理形式とは、その対象がどのような事態のうちに現れうるか、その論理的可能性の形式のことである。たとえばある対象 a が赤い色をしていたとしよう。対象 a にとって赤いという色は外的性質であり、他の色をもつこともありえた。つまり、〈a は青い〉〈a は黄色い〉等の事態も可能である。このことを「対象 a は色という論理形式をもつ」と言う。……」

故に、以下の論理式において“有”を用いた場合には、「論理形式」の概念に基づいて使用したとする。

- 2) 論理式の生成についての詳細は青木 (2013c) を参照されたい。
- 3) 副詞“在”の意味役割については青木 (2013a)、(2013b)、(2013c)、(2013d)、(2014a)、(2014b)、(2014c) を参照されたい。副詞“正”に関しては青木 (2014b) を見られたい。
- 4) 本稿で用いる“ ϕ ”(ファイ)は、論理式における成分が不確定で特定化できない場合に用いる記号と見なす。以下の論考における論理式の“ ϕ ”も同様とする。

参考文献

- 青木萌 2013a. 「現代中国語の統語成分“在”の用法と意味」, 『神奈川大学言語研究 2013』神奈川大学言語研究センター。
- 2013b. 「時態成分“在”の時制構造における意味と論理」, 『人文研究第 180 集』。神奈川大学人文学会。
- 2013c. 「時態成分“在”の生成過程」, 『人文研究第 181 集』。神奈川大学人文学会。
- 2013d. 「副詞“在”が表す二つの進行性」, 『連語論研究〈2〉』。大東文化大学国際連語論学会。
- 2014a. 「副詞“在”の意味解釈と問題点」, 『言語と文化論集第 19 号』。神奈川大学大学院外国語学研究所。
- 2014b. 「時態成分“在”と“正”の意味と論理」, 『神奈川大学言語研究 2014』。神奈川大学言語研究センター。
- 2014c. 「時態副詞“在”が表す二つの進行の論理意味分析」, 『人文研究第 182 集』。神奈川大学人文学会。
- ワイトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003. 『論理哲学論考』。東京: 岩波文庫。
- 松村文芳 2005. 『「把構文」と「被構文」に用いられる「給」の意味と論理』。大東文化大学語学教育研究所。
- 陈平 1988. 「论现代汉语时间系统的三元结构」, 『中国语文』。1988 年第 6 期。
- 龚千炎 1995. 『汉语的时相时制时态』。北京: 商务印书馆。
- 朱德熙 1982. 『语法讲义』。北京: 商务印书馆。
- Chao, Yuanren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.
- Chao, Yuanren. 1968 [2011]. *A Grammar of Spoken Chinese*. 商务印书馆。